第182回

北大小児科 特別集談会

クリスマス特別　豪華2本立て！
興味のある方はどなたでもお気軽にお越し下さい

日時　2024年 12月 25日（水）18：30～

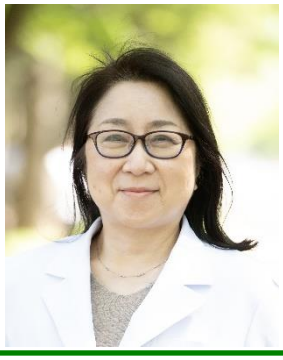
場所　北大医学部学友会館 フラテホール　現地開催のみ

『小児がんのトータルケア：特に終末期の対応』

北大医学部小児科
真部 淳 教授

『小児緩和ケアの実践 ～シンガポール留学日記～』

北大病院
小児成人移行期医療支援センター
長 祐子 教授



問合せ先
○小児科医局　TEL：011-706-5954
E-mail: secretary-ped@med.hokudai.ac.jp

【小児がんのトータルケア：特に終末期の対応】

真部 淳

小児がん患者の予後は過去60年間に大きく改善し、現在では約80%の患者が治癒する。小児がん患者の診療にあたっては、疾患の発生時から予後の良否にかかわらず、トータルケアの考え方が重要であるが、時代とともに参集すべき専門家の種類が増えてきた。チームのメンバーは、主に医療を行う職種と医療を行わない職種の2つに分かれる。前者は医師、看護師、薬剤師、理学療養士などである。後者にはソーシャルワーカー、医療保育士、チャイルドライフスペシャリスト(CLS)、ホスピタルプレイスペシャリスト(HPS)、子ども療養支援士、心理士、教師、保健師、地域医療の専門家などが属する。このすべての職種が定期的にカンファレンスを行って小児がん患者と家族をサポートすることにより、安定した環境で小児がん患者の診療が可能となるのである。

私は1985年に北大医学部を卒業後、30年余り主に東京の聖路加国際病院で勤務した。そこでは上記のトータルケアがよく実践されていた。

そして2019年に北大に戻った。北大病院は北海道全体の患者に対して最先端の医療を提供すること使命があり、ハード面の充実は必須であるが、一方、今でも治癒し得ない患者も存在し、ソフト面の充実も必要である。幸い、機が熟したというべきか、多くのスタッフが集まっており、多職種会議が機能してきた。2019年以後、主に北大病院で治療された小児がん患者の中で35人が亡くなった。2019年からの2年間に亡くなった9人は全員が病院で死を迎えた。ところが2021年に6人、2022年に5人、2023年以後は3人が自宅で死を迎えた。北大病院には在宅部門はない。在宅死が増えた理由として、通常の診療における入院期間の短縮方針によって患者と家族の病院への依存が小さくなったこと、小児を対象とする緩和医療チームの活動が充実してきたこと、北大病院の退院調整チームと在宅医療機関が子どもの在宅ケアを前向きに進め始めたことが挙げられる。現在、在宅医療においては疼痛管理、栄養管理に加えて、輸血や薬剤の投与も可能になっており、北大入院中に関わった医師・看護師と在宅を担当する医療者との密な共同作業が行われている。小児の最期を看取ると言うのは、信じられないほど大変な経験であるが、一方、亡くなっていく子どもたちは皆、気高く高貴であり、得難い経験ともいえる。

本講演では、小児科学のバイブル的な成書であるNelsonの教科書も参照しながら、小児のエンドステージへの対応について論じてみたい。

（開示すべき利益相反はない。）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

【小児緩和ケアの実践〜シンガポール留学日記〜】

長 祐子

小児緩和ケアの実践を学ぶため、英国でもオーストラリアでもなく、日本より一歩先を進むアジアの国:シンガポールに半年間臨床留学しました。病床800強の巨大小児病院での小児緩和ケアの様子をシンガポールの文化と共にご紹介します。